ほんりゅう尾北

No.102
2007.10
■発行■
尾北教職員労働組合
■責任者■
川崎 徹(犬西小)

全国学力テスト 問われる教育委員会の役割

愛知県教職員労働組合（尾北教労も加盟）では、愛知県の全市町村の教育委員会に対して、全国学力テストに関する討議内容と結果の公表について緊急調査を行いました。調査を通して明らかになった問題点と、全国学力テストがこれからどのような問題につながっていくのかを、ともに考え合いたいと思います。

「論議なし 記録もなし」

各教育委員会の回答で、まず目立ったのが「定例教育委員会できちんと論議をしていない。記録もない」というものが多かったことです（24市町教委）。全国学力テストへの参加が定例教育委員会の議題ではなく、「各課の報告」や「連絡事項」のような位置づけであるため、記録に残らなかったということです。

全国学力テストの是非について世間ではさまざまな議論がなされてきたのに、肝心の市町の教育委員会で正式の議題として議論されてこなかったというのは、認識の低さだけでなく、教育委員会のあり方が問題となってきます。

不参加を決定した犬山市では

全国の公立校で唯一不参加を決定した犬山市教委では、昨年の定例教育委員会で何度も議論を行い、不参加を決定してきました。その記録からは、「これによって地域格差や地域差別が生じる。東京ではすでにそうなっている。」「やりたいと思っている人の権利を奪うことになるのではないか。」などさまざまな角度から議論されたことが伺われます。

最終的に「『競争原理でなく、学び合いを大切にした教育』という犬山の教育理念に合わない」ということで参加しないことが決定されました。そして、父母への説明をきちんと行う必要があるということで、その後、各学校で説明会が行われることになりました。

結果の公開については慎重

結果の公開については「学校の序列化に結びつき、子どものためにならない」と考える教育委員会が多く、東京足立区での不正問題に象徴されるような学校間競争の問題を危惧する教育委員会が多かったということです。しかし、文科省から各自治体や学校へ結果が知らされると、情報公開でその結果の公開を迫られるという事態も予想されます。その際に教育委員会や自治体がどのような対応をするのかが問われます。

HP情報

愛教労による各教委調査結果及び犬山市定例教育委員会での討議内容の資料は、尾北教労ホームページに掲載してあります。
http://www.b-kyoro.com/
または、グーグルかヤフー「尾北教労」で検索

築かれる「学力テスト体制」

平均点などの結果が一般に公開されなくても、各学校や子ども個人には公開され、結果として学校や子どもが序列化されます。そして、学校では来年度の平均点を上げることが自己目的化される中、文科省が意図する「競争システム」が走り出します。それにより、教科書や授業内容や指導方法まで「学力テスト」流に強く影響され、学びがゆがめられていく心配も生じます。

今問題になっている教員評価の目標のひとつに学力テストの平均点を上げることが位置づけられることも十分予想されます。さらには学校選択の指標に利用されていく恐れもあります。

すでに県内では、今回の学力テストの事前対策を行った自治体もあります。また、ある教育長は学力テストの後、教員の研修会の際に「全国学力テストをこなせる子どもを育ててください。」と述べています。

そういった意味で、全国学力テストは、学校・子ども・教職員を競争に駆り立てる「学力テスト体制」にまきこんでいく巨大な仕掛けであると言えます。

尾北教労は、全国学力テストには反対であり、各市町の教育委員会に対して来年度は参加しないよう申し入れを行いました。

●報告　第9回子どもが輝く学校づくり集会

子どもの心をつかむには……

◀自己紹介でもひと工夫

9月15日（土）第9回子どもが輝く学校づくり集会（実行委員会主催）が行われました。今回の集会のテーマは「子どもの心をつかむには……子どもをどう見て、どう関わるか」でした。

午前中の講演では、「書くことで育つ、読み合うことでつながり合う」と題して、一宮・作文の会の野田邦昭先生にお話をしていただきました。その内容を紹介します。

■わたしは子どもたちの表現したい、伝えたいという意欲をつぶさないようにし、したこと・思ったことなどを素直に表現してもらおうと考えている。

■子どもたちを取り巻く環境は決してよくはない。作文教育の大切さを痛感する。子どもたち一人一人に寄り添いながらその子の持っているよさや値打ちに気づかせていきたい。

■すべての子どもに書く楽しさと、作文を読み合うことで子どもどうしが結びついていく感動を与えられたらと思う。

■具体的な方法としてはテーマを決め「あのねカード」にそのつど書いてもらっている。それらの作文を毎日発行している一枚文集を通して読み合っている。

■読み聞かせの機会をたっぷり取り、本の世界に親しませることや、たくさんの詩を紹介しその暗誦にも取り組ませた。これらは確かな認識と表現力を育てるために欠かすことができないと考えている、という内容でした。

参加者からは講演について次のような感想が寄せられました。

▼普段、学校ではなかなか聞きにくいことを教えていただいて良かった。

▼先生の話を聞いていて「このクラスの子どもたちは毎日をほんとうに楽しく過ごせているんだろうな、幸せなんだろうな」と思った。

▼手書きの1枚文集がとても素敵だなと思いました。

▼「自分も楽しいから続けられる。」という思いに共感。自分の実践を反省しながら聞いていました。

▼子どもたち一人一人のよさが作文を読み合うことで、認められている感じがしました。

▼教師としての生き甲斐が呼び覚まされるような内容でした。

分科会　授業づくり・学級づくり

授業づくり・学級づくりの分科会では、日頃の実践を持ち寄って紹介し合いました。

性教育の実践報告では、小学3年の学活で取り組んだ「男の子・女の子」の授業を紹介しました。男女の違いよりも、一人の人間としてそれぞれの個性の差があることを認め、それを大切にすることを子どもたちと確認していく授業でした。参加者で「男性度、女性度チェック」をしました。実際に、男性度の高い女性、女性度の高い男性もいることがわかりました。何を「男らしい・女らしい」と考えるかも人によってかなり違います。「自分らしい生き方を自分の頭で考える人づくり」を目指した実践が大切であることが確認されました。

その他、川をテーマにして取り組んだ総合学習や算数の学び会いの学習、低学年での給食のバイキングを利用した食育の実践などが報告されました。また、教育課程研修会の報告をもとに、私たちのめざす「子ども像」について話し合いました。自分の思いを話したり、人の考えを聞いたりして話し合うことで、自分なりの「子ども像」もはっきりしてきたように思いました。

分科会　障害児教育

今回は、通常学級担任がクラスに発達障害の子どもを抱えている場合、どのように理解し、どう支援していったらよいのかを考え合う会となりました。

Q　**授業中じっとしていられなくて、授業のじゃまをする子がいる。注意しても、何度も繰り返す。**

A　注意されることで、自分に注目してほしいという意識があるのではないか。また、注意されてもその意味が分からないことがある。具体的に、その子ができることを指示すると、本人が理解しやすい。

Q　**本人のいやがる言葉を使って注意すると、パニックになる。**

A　障害のある子は、自己肯定感が低いことが多い。本人がいやがることばは、出来る限り使わないようにし、良い点を見つけてやりたい。

Q　**「障害のある子がいるため○○ができない」というような、クラスのみんなの気持ちをどうしていったらよいか。**

A　教室の子どもたちは、障害のある子に対する担任の態度で変わるものである。叱らないでいると、ほかの子もその子を認めるようになる。担任の見方が、子どもたちにも広がっていく。障害のある子を包み込んだ学級づくりをしていってほしい。また、障害のある子には、その子に合った教材を工夫するのも1つの方法であろう。

話し合いの後で、「1学期はどうしてよいか分からず悩んでいたが、これで先の見通しが持てるようになった」という感想が出されました。